海卓子著
幼児の生活と教育

津守　真

海卓子氏の書物が出版された。いつか、まとまった印刷物として形をなしたものを見たいと思い、またそれを期待していたが、このたび「幼児の生活と教育」と題して、一冊の書物となったことは、幼児教育の発展のためにも、意義のあることと思う。実際に幼児の教育の現場にたずさわっておられる方々は、多くのすぐれた経験と、幼児の理解と、指導への洞察を持っておられても、それを文字にして、だれにでもわかる形で表現されないので、他の人に理解してもらえないことが多い。海氏の書物は、その幼児の現場の仕事そのものと取り組んだところから生まれているので意義深いと思うのである。抽象的な枠組みでなく、常識論でもなく、指導の過程そのものを問題にして、工夫し、試みたその成果をまとめているのがこの書物である。

本来は、幼児教育の分野には、もっとこの種の書物があってよいはずなのであるが、それが少ないので、この書物は出色のものであるといってよい。今後も、このように具体的な教育の場から生まれる書物が増していくことによって、幼児教育界の進歩があるのだと思う。

この書物の中心は、第二章、子どもの集団生活と、第三章、子どもの表現活動にあるのだろうと思う。とくに第二章は、この著者の年来もっとも得意とされる分野で、学ぶべきものが多い。くわしく読んで検討されると、多くの教えられるものを発見されるであろう。第二章、第一節では集団の指導の基本問題について論じているが、子どもの「経験」とは何かということをとり上げ、子ども自身の理解を重視し、行動が発展するキッカケを作るものを強調している。これはこの書物を一貫している考え方で、子どもの立場での理解と、指導を通しての行動の発展を示す場面の実例が、例96まで引用されている。よくまとめられた、この96の事例は貴重な資料であり、詳さに検討する価値がある。

第二章―第三節、集団生活の発展では、四才から就学直前までの二か年を、集団生活の面から八つの時期にわけて、具体例に即して指導の問題をとり上げており、どこの幼稚園でも直ちに役立てることができるであろう。

たとえば、入園初期の子どもは、みんなが先生をとりまいてアリのように集まって、たくさん子どもがいても、目標とするのは先生である。そのようなときに、〝一番前はだれがいいかナー〟〝○○ちゃんのうしろはだれ？〟〝△△ちゃんは今度だれのうしろに並べばいいの？〟などと先生が呼びかけることによって、子どもと子どもの触れ会う場面が多くなるということなど、各段階ごとに学ぶところが多い。第四節、第五節は、集団の指導で、当番、係、リーダーの指導を、これも年間の指導の時期を追って記されている。長年にわたる著者のこの分野での業績である。「けんか」の項「リレー」の項などとくにおもしろい。このような実例にすべていえることなのであるが、幼児心理の抽象的な一般原理よりも、指導に当って幼児の心理の理解に役立つ。

ひとつひとつの指導例についていえば、これでよいのだろうかと疑問をもつものもある。たとえば、第二章—第二節の例（P108）で、砂場で水クンデコイと命令ばかりして、自分ではくみにいかない子どもに対する指導の場合、指導者はこの子どもを権威的な命令者でなくしたいという指導意識をもっている。〝この中で、まだ一度も水をくみに行かない人、だれ？〟は、子どもの認識を明瞭にする上で良いが、〝へー、のぶよしちゃん、水くめないの！〟〝水くみもできない社長さんなの〟という先生の発言は、子どもの自我に対する挑発的な発言である。それはこの場の問題に関しては有効であろうが、別の場面では、この子どもが逆に先生のこのような発言をまねることになりはしないだろうか。同様の疑問を第五章例42（P200）にも感じるのであるが。たしかに子どもたちにとっても、先生にとっても口惜しい、放っておけないと感じさせるような場面であるが、あまりに徹底的に特定の子どもを悪者にしてしまうのはどうであろうか。他の子どもたちに対しても、他人の短所を見ることに敏感にさせるのではなかろうか。それに対して第二章—第三節例24（P104）の例〝あきチャンハ、蟬トルノウマイヨ〟というような、他人の長所を認識するような指導は大へん良いと思う。しかし、何はともあれ、このように具体的な指導の資料を提供されたことに大きな価値があるし、また、そこに見られる熱心な工夫に対して敬意を表したい。

この書物では、さらに、第一章—幼児教育の考え方で、著者の生い立ちから書き起こして、その経験された足跡を記されている。

研究的な態度で、幼児教育の一こま一こまを進めている点で、児童心理学書にも通じる書物であり、また同時に幼児教育の実際指導の書物として、初心者にも経験者にもひろくおすすめしたい。

（フレーベル館発行、昭40年四五〇円）